

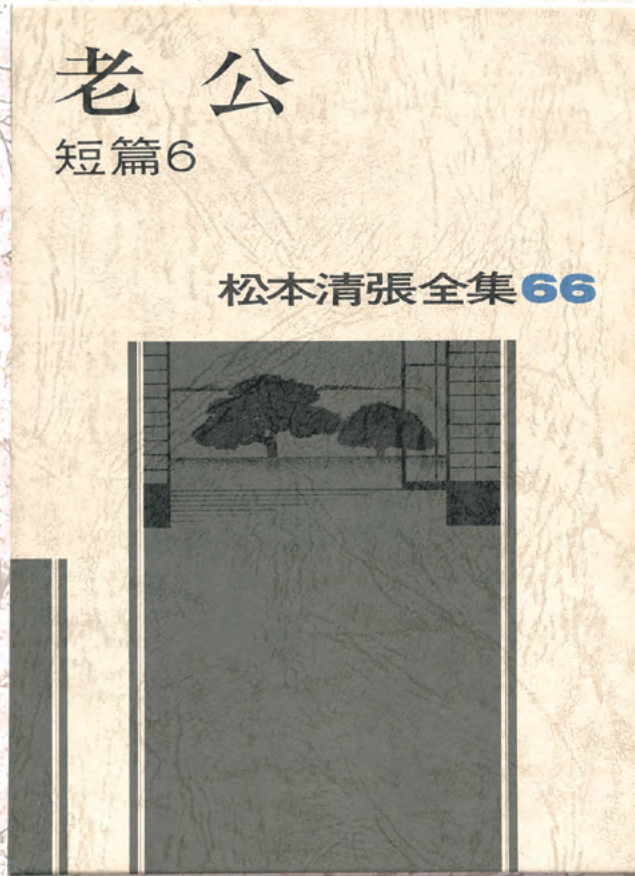
松本清張記念館

◆館報◆

2023.3
第71号

お花さんはパリ平和会議にも伴われ、
其の幸福を一世に歌われ、公の寵を一身に集めたが、
昭和三年三月二日暇を取り、大津湖上園の実家に隠棲していたが、
昭和四年二月京都帝大病院で腹膜炎手術を為し
予後が悪く三十五歳で死亡した。

(『西園寺公爵警備沿革史』)



『松本清張全集』66

平成8(1996)年3月30日 文藝春秋

現在入手しやすい本
『松本清張全集』66

目次

松本清張研究会 第44回 研究発表会	2
展示品紹介	6
点描 作品の舞台を訪ねて	6
『松本清張研究』第二十四号 発刊	7
友の会 活動報告(生誕祭・清張サロン)	7
トピックス	8

作品紹介

〈わたし〉は古書の展示即売会で、『西園寺公爵警備沿革史』(以下「沿革史」)を買った。〈わたし〉はその中に、「お花さんは(中略)公の寵を一身に集めたが、昭和三年三月二日暇を取り、(中略)昭和四年(中略)三十五歳で死亡した。」という文章を見つけた。さらに《運転手高木善七と云ふ者(中略)は其の後私警備主任(梅川)より少し先に失脚》との文章を発見する。

この高木善七の一人息子の善一は〈わたし〉の友人であった。亡父は西園寺公の運転手を「都合により」解雇され、痛憤していたという。善一は調査したが、判らぬまま病死した。〈わたし〉は友人の代わりにその真相を明らかにしたかったのである。

万策が尽きた〈わたし〉は、西園寺公の執事、熊谷八十三の働きに目を止め、「日記」を発見する。

『熊谷日記』昭和二年四月十六日。〈十日夜女中二人不在なりし件に付、(中略)中川氏を訪ひ状況を述べ〉この女中はよほどの大物らしい。

『熊谷日記』九月二十四日。《今度解雇された高木運転手来訪。(中略)中川と原田と論争ありしとも云ふ。問題と云ふは北尾問題なる由》

高木運転手の罷免と北尾銀行員の問題の拡大に熊谷が首を縮めるのは、お花さんの無断外泊がそこに加わるからだろうと〈わたし〉は推理する。

『熊谷日記』昭和三年一月十八日。《Madame Fleurの問題は中川氏から公爵に啓して諒承を得たる由。之で解決。(中略)郷里に帰らしむべし》

高木運転手はお花さんに従い、老公の目を盗んで、彼女を愛人北尾のもとに運んだ。激怒した老公の「疾風の命令」で高木善七は罷免された。《三月二日。Madame Fleur お宿下り》追放された。

松本清張研究会 第44回 研究発表会

令和4年12月3日(土) 午後2時~午後5時半

東京学芸大学 参加者 60名

研究発表

松本清張『昭和史発掘』『老公』などの成果の継承と発展

西園寺公望邸についての考察を中心に



発表者

奈良岡 聰智

京都大学
公共政策大学院教授

専門

日本近代政治外交史

はじめに 研究の導きの糸としての松本清張作品

西園寺公望は明治期に二回総理大臣をやり、大正昭和期に「元老」と呼ばれる、総理大臣を決定する権限を持った一番高い位の政治家でした。実はこのような西園寺の邸宅や大磯の研究をする上で、松本清張作品は研究の導きの糸となるものだと、私は感じております。

まず『昭和史発掘』(1964年~71年、「週刊文春」)です。その後半は「二・二六事件」を扱っています。この事件には、失敗や未遂に終わった事案がいくつもあります。湯河原では牧野(伸顕)内大臣への襲撃が行われ、失敗しています。静岡の興津町に住んでいた西園寺公望への暗殺計画もありましたが、実際には行われませんでした。清張さんはこういった事案にも周到に目を向けております。そして、「二・二六事件」研究資料を刊行しています。これは歴史研究の基礎に

なる大きな仕事ですが、その膨大な資料の中から政治家の家や居場所の情報もたくさん採れるのです。

もう一つ、「老公」(1990年12月~91年1月、「文藝春秋」という短篇小説があります。私は、政治空間と政治の実態との関わりに関心を持つ中で、「老公」に出会いました。これは、西園寺公望が晩年に住んでいた興津の別荘(坐漁荘)で発生したある事件の真相を、ミステリー風に解明した小説ですが、私が今行っている、西園寺の邸宅の研究とドンピシャのテーマを扱っており、大いに学ばせていただきました。

大正後期 昭和戦前期における 西園寺公望の邸宅の全体像

西園寺公望という人は、京都のお公家さんの出身です。実家は、上から数えて2番目のランクのお公家さんの徳大寺家です。一番上は藤原道長の摂関家の流れをくむ五摂家です。その下の清華家の一つが徳大寺家で、非常に高い家柄です。次男の公望は親戚で同じランクの西園寺家に養子に入って、名字が変わります。弟の友純(ともいと)さんは住友財閥の本家に養子に入り、兄公望の元老としての活動を住友の資金で支えました。

西園寺さんの場合、家柄が非常に良いこ

と、お金の心配がなかったこと、この二点が非常に重要であります。ですので、家をたくさん持っておりました。明治の後半は、東京神田の駿河台に本邸があり、別荘が東京以外にいくつもありました。

まず京都の別荘です。京都の御所の東側を流れる鴨川の東、左京区の吉田神社とか京都大学が現在ある辺りに西園寺家の別荘がありました。御祖父さんが開いた別荘清風館の名前を、西園寺の時代に清風荘と変えます。西園寺さんが亡くなった後に京都帝国大学に寄贈されました。それから神奈川県大磯に別荘がありました。

また、静岡にも別荘がありました。一つが坐漁荘です。現物は現在、愛知県犬山市の明治村に移築されています。興津にはレブリカが建っています。静岡にはもう一つ、御殿場の別荘がありました。

京都の清風荘にも、興津の坐漁荘にも、政治家やマスコミが押し寄せてくるのが多々ありました。西園寺の近況や東京などへの移動の様子が新聞でよく報道されました。首相を決定する権限を持つ人ですから、加藤高明、幣原喜重郎、岡田啓介など、偉い政治家が興津にやってきました。「西園寺詣で」とか「興津詣で」とか言われました。興津や御殿場も京都も、政治とは無関係な生活ではなかったのです。

西園寺公望と後継首相奪奪の 場所について

松方正義が死んだ後、一人だけになった元老、西園寺が首相を決めたときにどこにいたのかを、調べてみました。一番多いのは東京です。もめそうだなと思ったら、西園寺は東京に行って首相を決定しておりました。

興津で首相が決まったのは、1920年代から30年代の前半まででは、2回ありま

す。1926年と1931年です。西園寺はこのときなぜ興津を動かさないで首相を決めたのか。変な政権交代をさせないために、あえて興津にとどまったと解釈すべき事例です。

1926年に若槻礼次郎が首相に決まったときは、加藤高明首相が突然議会で倒れて死んでしまった。そこで、野党が騒ぎ出して「おれたちに政権よこせ」と言い出した。この場合、行き詰って政権が倒れたわけではないので、加藤首相と立場の近い同じ与党の人が首相になるべきだというのが、政党政治のルールです。そのルールに則って、自由主義者、政党政治論者の西園寺は与党憲政会の加藤の後継者の人を首相にすべきだと考え、肅々と興津で決めたと考えられます。1931年も同じパターンでした。浜口雄幸首相が東京駅で狙撃され重傷を負ったのでした。政党政治が強かった時代です。西園寺さんはどこで首相を選ぶかを非常によく考えて行動しております。このように居場所から政治を読み解くのは大変面白い作業です。

1937年、日中戦争が起こったときからは全部、西園寺は興津にいます。高齢のため興津で他の人の助言を聞いてこの程度にしようかという感じになります。1938年からは首相の決定権限は辞退し、事後報告を聞くだけになります。

「お花騒動」について

西園寺公望は、我が家は正妻を迎えない慣習があるということを言い訳にして、正妻を持たなかった人です。奥さんの存在は三人おりました。

1914年くらいから京都の清風荘に住みます。この京都時代に女中として雇ったのがお花さん、奥村花子という若い女性で

す。西園寺は非常に気に入って、パリ講和会議の時にも連れて行っており、メディアから非常に注目されました。帰国後、西園寺は興津の坐漁荘に住むようになり、お花さんは坐漁荘で女中頭をしながら妻のよくな処遇を受けていました。

ところが、これだけ寵愛を受けたお花さんが1928(昭和3)年にクビになります。そして、実家に戻った翌年、1929年に35歳の若さで病死してしまいます。実は、お花さんが西園寺家を辞めるにあたっては、かなりのドタバタがありました。

その陰で何があったのか。清張の解積は以下のようなものです。お花さんは1927年に住友から坐漁荘に派遣されていた若い男性職員と恋仲になった。そして、老公がいなくときに無断で外泊した。それが西園寺の秘書の中川小十郎などにばれた。中川秘書は激怒して、もう一人の秘書の原田熊雄、執事の熊谷八十三たちと協議をして、



お花さんを西園寺家から追放することを決めた。そして、男性とお花さんを乗せてデパートに連れて行った。西園寺家の運転手も咎めてクビにした。このプロセスを、熊谷の日記や原田の手帖などの資料を用いて書いていったのが、「老公」という小説なのです。

ところが、その20年後に、現京都大学名誉教授の伊藤之雄さんが『元老西園寺公望』(文春新書、2007)という評伝を書きました。伊藤さんの見立てでは、お花さんは1924年から1926年にまず女子を出産した。その父親は西園寺ではないと推定しています。それから、1928年に住友から派遣された若い男と恋仲になって、彼女は再び妊娠した。それを執事の熊谷さんに咎められて、西園寺家から追放された。清張とはかなり違う解釈をしています。また、論証の仕方が違います。伊藤さんは新聞報道や雑誌報道を非常に重視して分析しています。清張は関係者の一次資料に依拠して分析している。

私はどちらかというところ、清張の解釈の方に軍配を挙げたいと思います。まず伊藤さんは二回出産している一回目は1924年だったと言っていますが、これはちょっと考えにくいと思います。実は今回清張記念館から頂いた奨励金で静岡に何回か行き、地元に残っている新聞を目を皿にして調査しました。そうしますと、1924年にはお花さんと西園寺の仲は非常に良いのです。子どもを産んだ形跡のうかがえる記事も1924年の時点ではありません。大分後の週刊誌の報道で一件だけ、そういううわさ話を書いているのがある。伊藤さんはその資料だけに寄っかかって間違った解釈をしていると私は見ています。

第二のポイントは、お花さんは実は1925年に一時、坐漁荘を離れています。そこで女の子を産んでいることが確実な記事があります。これも私が今回、発見したの

ですけど、『読売新聞』に「お花さんの産んだ隠し子と西園寺老公親子の対面」というセンセーショナルな記事がありました。西園寺とお花さんの写真があつて、戸籍まで写真付きで載っている。赤ちゃんの加代ちゃん、別の男との間に作った子どもではないかと私は推定しております。

伊藤さんは1928年のときにも、あいつがした男との間で子どもができたと言っています。しかし、これも後から週刊誌にうわさ話を書いている記事が一個あるだけで、確実に間違いであります。

歴史研究としての「老公」の評価

清張が「お花騒動」に何で関心を持ったのかというと、クビになった運転手の息子と清張が友達だったというのです(*質疑応答・田中参照)。仮名になっていますが、清張の友達高木善一のお父さんの善七さんが坐漁荘の運転手をしていて、何かあることでクビになったらしい。でも何があったのかよく分からない。それを調べたいということで、清張が『西園寺公爵警備沿革史』とか執事の熊谷の日記を読み込んで、「お花騒動」という歴史的事実を解明したのです。それが、非常に読み応えのある文学作品にまで昇華されているところが、また素晴らしいと思います。

「老公」では、お花の出産のことは何も書いてない。その事実を把握できてなかった点は大きな欠点ですが、清張は西園寺の周辺の一次資料を非常に精密に読み解いて、お花騒動の根幹部分を伊藤さんが書く20年ほど前にすでに明らかにしていた。このことは、研究者からすると驚きであります。

例えば、清張が使った「熊谷日記」は、現在では、国会図書館で原文を読むことができます。今回、私は原文をコピーして解読いたしました。「老公」に記されているものはフラ

ンス語も含めて、ほぼ間違いがないですし、完璧なぐらいです。非常に正確に読み、解釈も納得のいくものを下しています。研究としても超一流の価値を持つすごい小説というのが私の判断であります。

おわりに

今後、清張の仕事は、歴史研究という観点からも、あるいは建築史や庭園史といった観点からも、どんどん参照され、発展的に継承されるべきだと考えます。

ただ、最後に一つだけ、清張の西園寺に対する見方に関しては間違っているとありますがあります。「老公」の中の「政治的に無能」という記述をみると、清張は西園寺のことを政治家としては全然評価してなかったことが分かります。

しかし、実際の西園寺は骨の髄からのリベラリストでした。政党政治や明治憲法体制を守り、国際協力を重視するという強い信念を持っていた人です。満州事変や日中戦争には絶対反対でした。二・二六事件の時もそうです。清張が描いていた西園寺のイメージは古い研究に引きずられており、政治家としての西園寺の全体像については、伊藤さんの評伝のほうが的確に描いています。

質疑応答

【質問者】静岡大学の南富鎮と申します。この「老公」という作品は、引用文が非常に多いのですが、「熊谷日記」とか「原田日記」とか、「西園寺公爵警備沿革史」とか、作品の中の引用は本文と一致しているのでしょうか？

【奈良岡】この「老公」に関しては、非常に堅牢な実証のもとに正確な引用をしているというのが私の判断です。『警備沿革史』

は国会図書館にないので入手しにくいですが、非常に忠実に的確に引用されています。それから「熊谷日記」については発表でお話ししたとおり、読解にはほぼ間違いはない。

【文藝春秋 田中】 本日は貴重な話をありがとうございます。どうぞありがとうございました。私、実は入社して最初に担当した作家が松本清張先生で、藤井康栄さん、前清張記念館館長とともに、「老公」という作品を担当いたしました。今、南先生から非常に貴重なご意見をいただきました。松本清張という作家はやっぱり小説家です。今回の「老公」のように資料をベースにした作品でも、最後

は小説として書くんですね。だから、どこまでが資料に基づいたファクトであるか、どこからが作家としての想像力を働かせたフィクションかというのが、作品ごとに違うところがあります。

*この「老公」の一番大きなフィクションは、清張先生は運転手の友達ではないことなのです。つまり、この小説の「わたし」というのは、松本清張本人ではなくて、その「わたし」が虚構だという理解なのです。「わたし」語り手で「物書き」である、だがその「わたし」は松本清張と同一人物ではない。「老公」は一番外側のところがフィクションであるということも補足させていただきます。

「万葉考古学」における都市と地方をつなぐ交通の研究

研究発表



発表者
鈴木 喬
奈良大学 准教授
専門
上代文学

松本清張作品と『万葉集』

松本清張は作品の中で、故地、つまり歴史的な場所を取り上げることが多々あります。その一部として『万葉集』を引用することがあります。

まず「点と線」です。この中で松本清張は万葉集を引用しています。

「この海岸を香椎潟と云った。昔の「檀日の浦」である。太宰帥であった大伴旅人はここに遊んで、

しかし、現代の乾いた現実はこの王朝の抒情趣味を解さなかった。」

この海辺を通りかかった一人の労働者が情死体を発見するという、冒頭の有名な場面です。

大伴旅人のこの万葉歌は、『万葉集』巻6・九五七〜九五九番歌の引用です。その一首

目が、「帥大伴卿の歌一首」（つまり、大宰府の長官であった大伴旅人が歌った歌で、「点と線」に引用されている歌）です。「朝菜」と歌にあるように、早朝なわけです。そして、

いざ子ども香椎の瀉に白妙の
袖さえぬれて朝菜摘みてむ

（万葉集巻六）

と詠んだ。

しかし、現代の乾いた現実はこの王朝の抒情趣味を解さなかった。」

この海辺を通りかかった一人の労働者が情死体を発見するという、冒頭の有名な場面です。

大伴旅人のこの万葉歌は、『万葉集』巻6・九五七〜九五九番歌の引用です。その一首

目が、「帥大伴卿の歌一首」（つまり、大宰府の長官であった大伴旅人が歌った歌で、「点と線」に引用されている歌）です。「朝菜」と歌にあるように、早朝なわけです。そして、

冬という状況。『万葉集』のこの和歌が「点と線」という作品を重層的に担っているということが分かります。

「たづたづし」という作品は万葉歌の「たづたづし」をタイトルにし、その『万葉集』を冒頭に引用しています。

夕闇は路たづたづし月待ちて
行かせわが背子その間にも見む

この七〇九番歌を引用しつつ、「この歌は奇妙にわたしの頭に印象を刻んでいる。」と作品は始まります。そして、この万葉歌の背景として、万葉の頃は婿が女房の家に行く通婚だったから、こういう、女房が帰ろうとする夫を月が出るまで居てくださいと引き留める情景もあったのだ、と解釈しています。そして、「実は、このままの感情が、ついその前まで、わたしの身に降りかかっていたのである。」と作品は展開していく。つまり、この万葉歌が作品の重要な要素となっているわけです。

この「たづたづし」の歌は『万葉集』巻4の七〇九番の歌です。豊前国の娘子（おとめ）は遊女だという説が今一般的です。遊女の「大宅女」の歌が一首。

夕闇は 道たづたづし 月待ちて
いませ我が背子 その間にも見む

松本清張は通婚を想定しているが、今の万葉集研究では宴会の席における遊女（遊行女）の引き留め歌だと想定されています。なぜならば、平安時代までの通婚は朝になつたら男が帰るのが普通でしたから、月が出てくるのが通婚では解釈できないわけです。

また、「たづたづし」では「行」は「行かせ」なのですが、現行の万葉集研究では「いませ」と読んでおられます。女性が男性に対して、尊敬の念をもって「どうぞゆつくり気を付けて行って下さい」という。

このように、「たづたづし」は、松本清張の具体的かつ独自の解釈で、万葉歌の場を立体的にイメージして、作品の中でそれを肉付けし、作品を成り立たせていると理解できます。さらに「たづたづし」が巧みだと思おうのは、万葉歌を微妙にリンクさせながら物語が閉じられるところです。「木曾の日昏れは早い。蒼茫と昏れかかる空の一角には宵の月がかかっていた。」月が出てくるわけです。「路は山峡の深い所では暗く、ひらけた所では月に照らされていた。車は、たどたどしくそこを進んだ。」

このように見えてくると、『万葉集』をどくに勉強したわけではないと言いがら、よく読んでいると思われれます。

次は、「古代探求」（1971〜1972年）です。合計22首の万葉歌が用いられています。『古事記』『日本書紀』を基軸としながら、『万葉集』は、古代史研究の素材、古代を立体的に描く上での素材として使われているのです。

「古代探求」においては、次のように『万葉集』を引用しています。

うつせみの命を惜しみ 波に濡れ
伊良虞の島の 玉藻刈り食す

これは二四番歌ですが、「うつせみ」というのが枕詞で、命にかかる。命が惜しいので鳥流しになった伊良虞の島で、玉藻を刈って私は命をつないでいます、という万葉歌です。これの解釈について、松本清張は次のように具体的に解釈を提示している。玉藻を食べたのではなく、刈って食べ物と物々交換して生きているのだ、と。

このように松本清張は、小説などの作品世界では一つの場面設定や作品の奥行きを照らしています。対して、「古代探求」など歴史を描く場面では『万葉集』と向き合いながら独自の解釈を提言していくのです。

松本清張の「万葉考古学」

「私の万葉発掘」(1973年)という作品の中で、清張は「私は『万葉集』をとくに勉強したものではない。古代史や考古学関係の本をわりによく読むので、それにかかわりあいのありそうなところを『万葉集』から搜索していった程度である。」搜索というフレーズが出てきます。「壬申の乱」と『万葉集』とは密接だし、考古学でも遺蹟と『万葉集』とはきりはなせないものがある。」と指摘しています。

「万葉考古学」のことは、小説『万葉翡翠』——求めて得まし玉かも——でこのように出てきます。

「『ぼくはね、万葉考古学をやりたいと思っていた時期があったよ』S大学の若い考古学助教授の八木修蔵氏は、研究室で三人の学生と雑談しているときに云った。『ここから話が始まるわけです。』

では、「万葉考古学」とはいったいどういうものなのか。学生が言います。「万葉の歌に織り込まれた字句から、古代の生活を探求しようというわけですね」つまり、「万葉集」から古代を描く。それは松本清張の『古代探求』と深くリンクしているわけです。

出発点となるのは次の万葉歌です。

浄名河の 底なる玉、

求めて 得まし玉かも。

拾ひて 得まし玉かも。

惜しき 君が

老ゆらく惜しも

(三三四七)

「得まし玉かも」は、現行「得し玉かも」と訓むのが一般的。「得まし」と訓む注釈書は一つもございません。これは松本清張が独

自に作り上げた訓みです。作品の八木修蔵の訓みなのです。

「万葉翡翠」については、おそらく中西進さんの『松本清張研究』6号の論文で事足りていると思います。(詳しくは、同研究誌6号論文をお読みください)中西さんはこの「まし」の改変は松本清張の作品上の意図的改変だと指摘します。私も同意見です。

さて、「万葉翡翠」に戻ります。「求めて得まし」拾ひて得まし」という言葉が何を表すのかという疑問から出発して、古代の生活、実態を描く万葉考古学を考えたのだ、と八木氏は言います。そして、「この字句については、少し解釈の違いがある。(中略)折口先生の『其玉は探し廻って、手に入れた玉と言ふのか。偶然得た玉と言ふのか』という説を支持したい。けれど、(中略)『求め』という云い方に、多くの特別な解釈がある。」と続けます。つまり、解釈ありきの訓みの提示が、この「万葉翡翠」の「万葉考古学」にはあるわけです。「つまり『求め』という言葉は、ぼくは『買う』という意味に解釈したい」と。

契沖以来「沼名河は天上に有河なるへし」とし、実在の河ではなく、修辭的な架空の河とします。『万葉集』巻13のテクストの配列が、大和↓伊勢↓近江↓美濃↓安芸(または長門)↓天上界の順になっており、当該歌が天上界のところにあるというのが主な理由です。

対して、「万葉翡翠」の八木助教授は、「玉」は「翡翠」とし、実際の河であると仮説を立てていきます。そして、事件が起こっている。「私の万葉発掘」でも、国文学者に対して、考古学のことにも絶えず注意してもらいたい、糸魚川に翡翠があるという考古学的知見を援用しながら読み解く必要があるのだと提言します。私には耳が痛い。

中西進は「完全に松本説に賛成した」と論文に書いています。そして、講談社文庫『全

訳注』で、「新潟県の小滝川か。そこでとれる翡翠が、神話上の沼名川と合体して一層高貴な玉と考えられたか」と地上の「沼名川」説を採用し、伊藤博以降この「沼名川」説が援用されています。

ところが、中川幸廣氏は「沼名河の底なる玉」という論文(1962)の中で、「沼名河」は越後国頸城軍沼河郷(現在の新潟県糸魚川市域)の川を歌ったものだと言い、巻13の編者はそれが理解できず、天上の河として「雑歌」の部の最後に収録したと指摘しました。中川氏は残念ながら、松本清張の「万葉翡翠」は引用していません。「沼名川」を糸魚川支流だとする説は、松本清張ではなくこの中川幸廣さんが起点だと見られているわけです。「万葉翡翠」は1961年2月の発表で1962年の中川幸廣論文に先行するのにも、小説作品でしかないからと重視されないのです。研究者は前の中西論文さえ見ないのです。中西進は万葉集研究の神様のな位置づけの人です。しかし、松本清張について論じているから我々研究者はその論文に目が届かないのです。

「万葉考古学」とは、書かれているものだけを解釈した日記すのではなく、人間がもよおした事実、人間の物、「人間ありき」の古代を描いていくことだと、私は思います。それが「古代探求」だと思います。コト(文献学)とモノ(考古学)、そしてココロ(万葉集)で歴史を捉えていく態度、それが「万葉考古学」なのです。

松本清張万葉学の検証と顕彰

まずは「検証」です。一番大きな問題は、解釈ありきの訓みです。松本清張はまず解釈があつて、「万葉集」の漢字の訓みを提示していく。これは、松本作品における『万葉集』の引用と深くつながっているが、これは

研究的ではない。もう一つ、「個」での研究には限界があるということです。「個」の研究では国文学者からは見向きもされません。だから、ネットワークが必要なのだと思います。

次は、松本清張の「顕彰」の方です。

○現在訓みうる可能性のある訓みの提示。これはやはり必要なのだと思います。現在の万葉集のテクストは、読めないものは漢字のままで挙げておくだけです。完全には読めなくても、現状訓みうるものを提示する。それが、松本清張の万葉考古学における「万葉集」の訓みだと思います。

○東アジアにおける日本という視点、通時的な視点など巨視的な視点が、『万葉集』研究にも必要なのだと思います。

○人間ありき、というか、より立体的な人間の営みとしての解釈もやはり必要だろうと思います。全体を見ると捉え方が必要だと思えます。

これらが、松本清張の万葉学が現代の『万葉集』研究へ提言するものだと考えます。



「昭和史発掘」関連資料①

当館には、清張作品をジャンル別に紹介したエリアがある。現代小説、推理小説、歴史・時代小説、現代史、古代史、フィルムグラフィ（映画）と、その範囲は多岐に亘っている。

現代史ノンフィクションの分野で、「昭和史発掘」は大きな仕事だった。特に二・二六事件は、全体の半分近くを占める。連載期間でみると、ざっと八年のうちの四年間が費やされている。

展示パネルの映像で、清張は二・二六事件について次のように語っている。

天皇制というのは、重臣層のなかに組織されている。だから重臣の十重二十重の垣根のなかに天皇がいることによって、天皇制というのは成り立っている。

だから二・二六事件の決行が起きたとき、朕が信頼している重臣たちを殺傷して、そしてなんでそういったことが朕の意志にかなうか。重臣を殺傷したことは朕の首を真綿で絞めるようなことである、と天皇は言っています。

そして、遂には取り返しのつかない日中戦争、そして太平洋戦争へと突進していった。

明治四十二年生まれの清張は、昭和時代の移り変わりを実体験として知っていた。しかし国民には何が起きているのか不可視のまま、開戦そして敗戦を迎えたという思いがあったのでは

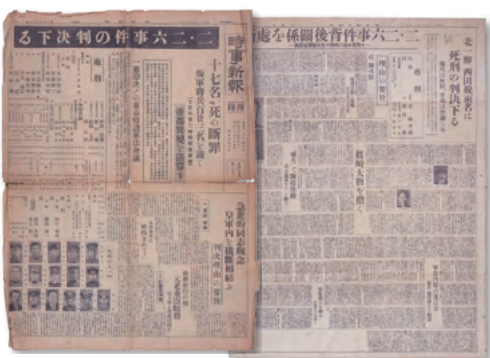
ないか。

ケースには昭和十一年七月七日の「時事新報」号外と、昭和十二年八月十四日の「東京朝日新聞」号外の複写が、縮小して展示されている（注1）。二・二六事件で逮捕された軍人たちの軍法会議（裁判）は非公開だったため、国民は七月七日の報道で二・二六事件の全貌と判決について知ることとなる。十五名の死刑執行は七月五日、陸軍省の発表は十二日だった。新たに死刑判決が下った北、西田と、村中、磯部らの時も同様に処刑後発表された。

当館展示の「昭和史発掘」関連資料には、最も貴重な『蹶起趣意書』もある。その話はまた、別の機会に。

注1 現物は、誌面を半分に折らないとケースに収まらないので、記事全体を示すためと、劣化防止に配慮し、縮小複写の形で展示しています。

（学芸員 柳原暁子）



点描

作品の舞台を訪ねて

「啾々吟」——蓮池

「啾々吟」は「或る『小倉日記』伝」とほぼ同時期に「オール讀物」に投稿した短編時代小説である。幕末の肥前佐賀鍋島藩の藩主・直大と同年同日に生まれた、この物語の語り手である家老の子「予」こと松枝慶一郎と御徒衆の息子・石内嘉門の物語である。

予と嘉門は同じ日に生まれた因縁によって若殿の近習となり親交を結ぶ。学問に熱心で、利発聡明な嘉門だが、その割には藩主にも重用されず、同僚や組頭からの気受けもよくなかった。嘉門はそれを自分の身分が低いせいだとひがんだ。予は、嘉門に同情し、励ますため、鍋島の支藩のある蓮池に住む叔父の家に嘉門を連れて行く。そこには、親同士の決めた許嫁の千恵がいた。やがて、嘉門は、千恵に思いを寄せて、予に告白の仲介を頼むが、予は千恵とは許嫁の間だと言いつつ、そのまま時間が進み、家老職を継ぎ、千恵と結婚したことが彼に人づてに伝わってしまう。

屋敷の裏は、水を湛えた濠（ほり）が取り巻いていた。この地方は、こういふ濠が、無数に縦横に走っている水郷である。濠には菱（あし）がしげっている。菱の実（あし）は、名のように菱形の黒い色をしているが、茹でて硬い皮をむくと、栗に似た味がする。近在の百姓の女などは、季節になると、片手間に城下（しろ）に売りにきた。

この地方で、ハンギと呼ぶ、人間が乗って水面に浮かぶ大きな盪（うし）がある。菱の実をとるには、このハンギに乗るのだ。千恵は、ハンギに乗って手で水を掻き、水面を移動しながら、菱の実を採った。予と嘉門は岸に立って見物した。

初夏の強い陽が水に反射して、千恵の顔を下から明るくした。あたりの木立や水草の色をうつして、透明な蒼さが映えている。水が動くとき、千恵の顔の光の波が揺れるの

だ。予は幼少から見なれた千恵が別人のように思えた。

「ほうら、もう、これだけ採れましたわ」と、千恵は膝のあたりから、菱の実を握って、さし上げて見せた。あどけない、美しい微笑だった。水面に泛（は）かんで漂い、手を挙げて示した彼女の一瞬のその姿態は、さながら一幅の画をみるようだった。予と一緒にいらんでいた嘉門も、言葉をつまんでいた。

（松本清張全集35）

作品に登場する蓮池は佐賀市の中心部から東へおおよそ6キロメートル付近一帯の地名である。かつて佐賀江川と周辺のクリークを濠とした旧蓮池鍋島藩五万石の居館があった場所、明治初年に蓮池公園として整備された。今回は、この蓮池公園を訪ねた。田園地帯の中にある静かな公園の中をゆつくりと散策し、周辺の濠を眺めながら菱の実を採る様子想像してみた。公園には築山や池が整備され、多くの歴史遺産もある。また、桜や花菖蒲の名所としても知られているとのこと。私が訪れたのは二月の寒い日で、人気もなく、かつての城下町の賑わいは感じられなかった。桜が咲く頃、また来てみたい。

（小田智子）



蓮池公園



菱の実採りの様子（提供：神埼市）

研究誌「松本清張研究」〈第二十四号発刊〉

特集 今読む「昭和史発掘」

特別対談

今読む「昭和史発掘」

保阪正康・加藤陽子
司 会 田中光子
特別参加 藤井康栄

論文

「昭和史発掘」の中の文学者たち
元老西園寺公望の別荘坐漁荘における「お花騒動」に関する一考察
綾目広治
—— 松本清張「昭和史発掘」『老公』の成果の継承と発展 奈良岡聰智

関連企画

小説に描かれる二・二六事件
エッセイ 恩田 陸・山田正紀・北村 薫・奥泉 光
ブックガイド 編集部

エッセイ

不屈き者、時代の「飛び石」を論じる 坂上 泉

再録

「二・二六事件」研究資料「I編者あとがき」
「二・二六事件」第一巻まえがき 松本清張
松本清張の実像 藤井康栄

誌上再録

研究発表「松本清張：メディア・アダプテーション・ミドルブラウ文学」
十重田裕一

寄稿

松本清張「或る『小倉日記』伝」と『両像・森鷗外』、
そして森鷗外の知られざる台湾体験 吳佩珍

記念館研究ノート

林熊生こと金岡丈夫と松本清張 柳原暁子

友の会 活動報告

● 生誕祭

令和4年12月17日(土) 14:00~16:45
松本清張記念館 企画展示室

友の会では、毎年、清張さんの誕生日(明治42年12月21日生)をお祝いする「生誕祭」を開催しています。今回は、清張さんの生誕113年にあたり、友の会発足22周年の年です。

加島巧会長の開会あいさつの後、松本陽一さんから、コロナ禍以降、父のふるさと北九州市までお伺い出来ていないので、早く記念館を訪れたいとのメッセージが披露されました。

このあと、NHKドラマ「一年半待て」が上映され、加島巧会長による解説も行われました。続いて、コロナ禍で見送られていた茶話会を開催し、ケーキカットセレモニーが行われ、華やかな、お祝いムードに包まれました。

最後に、古賀厚志館長による、オカリナ演奏会「清張作品で迎える郷愁の調べ(童謡唱歌編)」が開催され、清張作品の朗読とその作品にちなんだ曲が演奏されました。

久しぶりの、ケーキカットセレモニーと初めてのオカリナ演奏会でしたが、参加者の皆さんから、「とても良かった」「素晴らしい生誕祭だった」等の声をいただき、心に残る生誕祭となりました。



● 清張サロン (特別講演会)

令和5年3月18日(土) 14:00~15:30 参加者22名
講師 中川 里志(松本清張記念館学芸担当主任)
テーマ 「飛鳥に残る謎の石造遺物と『火の路』」
会場 松本清張記念館 企画展示室

特別講演「飛鳥に残る謎の石造遺物と『火の路』」を中川里志学芸担当主任が行いました。

「火の路」(1973.6.16~1974.10.3、『朝日新聞』)は、前年、高松塚古墳壁画の発見で全国的に注目をあつめていた奈良県飛鳥地方を主舞台にし、古代ペルシアの遺物がのこるイランにまで作品空間を広げて、飛鳥にある古代石造遺物の謎の解明を通して、飛鳥時代にペルシア人(プロアスター教徒)が渡来していたという大胆な仮説を、主人公T大史学科助手高須通子の二つの論文に託して論証しようとした長篇推理小説であり、芥川賞受賞から二十年が経ち、名を成してなお独自の新天地を拓こうとした意欲作であると講演しました。また、考古学研究の第一人者であった、故・森浩一氏が、「『火の路』は非常に高いレベルの学術論文、プラス推理小説の両方をミックスさせた見事な小説」と評価されたことなどを紹介しました。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761



令和5年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

若年層に清張作品に親んでもらうとともに、表現力を学び、豊かな心を育む契機となればという思いから始めました。

新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神の伝達を働きかけるものです。

■**応募対象** 全国の中学生・高校生

■**課題図書** 中学生・高校生ともに下記から一作品

『**点と線**』（『点と線』文春文庫、新潮文庫）

『**或る『小倉日記』伝**』（『或る『小倉日記』伝』新潮文庫）

『**地方紙を買う女**』（『張込み』新潮文庫）

■**応募方法**

中学生、高校生ともに1,200～2,000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。

手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。

原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募用紙はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■**応募締切** 令和5年9月30日（土）※当日消印有効

■**選考** 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■**発表**

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」およびHPで発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■**賞品**（受賞人数等変更の場合もあります。）

○最優秀賞（1名）

○優秀賞（中学の部…1名）（高校の部…1名）

○佳作（中学の部…3名）（高校の部…3名）

※最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は〈特別賞〉として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

● 応募先・問い合わせ ●

〒803-0813 北九州市小倉北区内2番3号 松本清張記念館 読書感想文コンクール係
TEL. 093-582-2761 FAX. 093-562-2303 ※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

● 講演に行ってきました ●

5月18日	祝町市民センター
8月19日	北九州市民カレッジ
8月27日 9月27日 10月25日 11月22日 12月27日	北九州プロバスケットボール同好会
11月6日	北九州市立小倉南図書館
11月22日	志井市民センター
2月17日	下関夜話会



● 編集後記 ●

ようやく寒さも和らぎ桜の季節が巡ってきました。

今年は、市制60周年、記念館開館25周年、松本清張研究会創立25周年といくつもの節目を迎えます。この記念すべき年に、第24回松本清張研究奨励事業の入選企画の日・中・米の研究者による『砂の器』国際シンポジウムを開催します。オンラインで配信も行う予定です。申し込み方法など、詳細については、ホームページでお知らせします。皆さまのご参加をお待ちしています。 (T.O)



イラスト：山藤 章二

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<https://www.seicho-mm.jp>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
- 休館日 毎週月曜日（休日の場合は翌日）、年末年始（12/29～1/3）、館内整理日
- 観覧料 一般／600円（480円） 中・高生／360円（280円） 小学生／240円（190円） ※（ ）は30人以上の団体
- アクセス JR：小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からバスをご利用いただく便利です（小倉城・松本清張記念館前下車） 車：北九州都市高速 大手町ランプより5分

